様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月１日現在

機関番号：３２１０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009 ～ 2011
課題番号：２１５２０５９２
研究課題名（和文）　英語学習者におけるディスレクシアとディスグラフィアに関する調査

研究課題名（英文）　Dyslexia Research among Japanese Learners of English

研究代表者
中川　武　（NAKAGAWA TAKESHI）
つくば国際大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：70326817

研究成果の概要（和文）：本研究はディスレクシアを中心に、英語学習において教員がどのような学習支援を行うべきかに関して調査・論考したものである。大きな柱として①ディスレクシアの基礎知識・情報収集②アメリカ（大学での初年度教育に関する学会参加・2009 年度）・シンガポール（ディスレクシア支援センターおよび教育機関の視察・2010 年度）における実地踏査③大学生を対象としたオーラルパーセプション活動の提言から成る。音韻理解や音素の結び付けが難しい潜在的なディスレクシア学習者に対するオーラルパーセプション活動の推進を、本研究の結論とする。

研究成果の概要（英文）：This project sums up the emphasis of teaching English, especially by activating the learners' phonetic skills. Learners of dyslexia have a huge struggle in reading/writing, but in recent studies and governmental support (as observed in US and Singapore), they've shown a noticeable improvement in their remedial classes. To activate learners' phonetic sense, three authors have been introducing a series of aural perception activities in their classrooms since 2010. Further researches and studies are necessary to link dyslexia and aural-centered activities, seeing how effective they work.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	100,000	30,000	130,000
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：教授法・カリキュラム論

１．研究開始当初の背景

ディスレクシア（Dyslexia）とは、学習障害（Learning Disabilities/Disorders: LD）の一種と捉えられ、「読み書きにおける困難や障害」と理解され「失読症」「識字障害」とも呼ばれる。母国語において、書かれた文字を読もうとすると反転したり重なったりする、歪む、ぼやけたり文字が動く等、症状には個人差がある。

日本人学習者を対象とした英語学習におけるディスレクシアへの理解が深まり難い原因を列挙する。

①母国語である日本語を含めたディスレクシアの一般的な知識および理解に関して現場教員が十分に把握しておらず、また知る機会に恵まれていない。よって英語に関しては、一向に知識が普及しない。

②学習者にとっても未知の概念であり、自認

し難い。
③「学習障害」であり、症例が顕在化しても偏見や思い込みによって本人や周囲が直視せず、隠そうとする傾向がある。教員と保護者、学校と家庭間で情報の共有や連携が図られ難く、適切な処遇が期待できない。
④ディスレクシアと判定する基準やガイドラインが設けられておらず、明確な診断や線引きが不可能である。
⑤潜在的ディスレクシアの兆候があると判断された場合でも、具体的な対策に関する知識が浸透しておらず、処遇が図られない。
　ディスレクシアに関して、英語教員として何に留意し、配慮すべきなのか。学習障害の一環としてのディスレクシアは、補習教育を意味する「リメディアル」や、一般的に大学の新入学生を対象としてスタディスキルを獲得させるための「初年度教育」といった諸分野とも不断の関係にあり、軽視できない存在である。

２．研究の目的
　本研究は読み書きの学習障害の一種とされるディスレクシアを中心に、日本での英語学習において、英語教員がどのような学習支援を行うべきかに関して調査・論考したものである。①ディスレクシアに関する基礎知識・動向の把握②アメリカ（大学初年度教育・FYE 関連学会への参加）・シンガポール（ディスレクシア協会、以下 DAS・および教育機関訪問）③日本人大学生を対象とした、CALL システムを利用したオーラルパーセプション活動の提言から成る。音素の結び付けが難しい潜在的なディスレクシア学習者に対してオーラルパーセプション活動を推進することを本研究の副次的な目的とする。

３．研究の方法
　3ヶ年の研究計画に則り重点的に実施されたのは以下の項目である。
　①４年制大学・新入学生の英語文法力調査（中学校検定教科書ターゲットセンテンスを活用し、作成した基本文法力調査）・学習調査（学習方法の獲得や学習観に関して、心理学的見地を応用した質問紙法による調査）・英検プレイスメントテスト実施による習熟度別クラス編成に加え、ディスレクシアへの処遇を想定した「オーラルパーセプション活動」の展開（2009～2011 年度）：英語を専門としない 4 年制私立大学で 2010 年度より「オーラルパーセプション活動」をシラバスの中核として位置付け、3 人の研究者による指導を継続的に実施した。当初はシャドウイングへの橋渡し的な役割を期待しての導入から、潜在的なディスレクシア学習者に対しての有効性に着目した「Minimal Pair 練習（音素を区別するための訓練）」教材である。①プレテスト 50 題（教材に付随）②発音練習 20 章・章ごとの確認テスト（1 章 1 回あたり約 30 分/1 コマ 90 分×20 回を割当）③ポストテスト（①と同一）の流れで活動を展開した。プレテストは 50 問から成り、学習者が音の違いを聞き分けられるか（led-led-red のように 3 つの連続する単語を聞き、1 番目と 2 番目が同じ場合は 12、1 番目と 3 番目なら 13､2 番目と 3 番目なら 23、全て同じなら 123、全て異なれば 0 をマークする多肢選択式）を問うものである。CALL 教室において実施される具体的な活動手順を示すと①学習内容の提示（プリント配付→ノートへの添付指示）5 分→②音声データ配付と個人練習(1)　10 分→③教員による発音のポイント解説・教員のリードによる全体練習 5 分→④個人練習(2)→聞き分けが出来るかを問う予備練習問題の実施 5 分→⑤10 問のまとめテスト→ペアによる採点・点数管理 5 分となる。CALL システムの活用により学習者に十分な自律学習と反復練習の時間を与え、章ごとに毎回 10 問の小テストを必須とすることで、全 20 回に亘って学習者の集中力と動機を喚起することに努めた。プリントは必ずノートに貼付、保管させ、授業中に解説される発音のポイント等を積極的に書き入れるよう促し、ポートフォリオ式の学習を導入した。音声教材には具体的な日本語の説明が含まれる（ナレーション例として「上下の歯を軽く合わせ、舌先を歯茎に近づけて、その間から息を出して発音します」「唇を丸くして突き出し、舌の前の部分を歯茎に近づけて、息だけを出します」等の解説が入る）が、教員が繰り返し実演し、学習者の活動をモニターすることで、学習者の直感的な理解を補助した。
　②英語圏における FYE（初年度教育）・ディスレクシア等関連研究の動向や、大学における初年度教育の現状につき情報収集を目的として、2010 年 2 月にアメリカ・コロラド州デンバーで開催された第 29 回 FYE 年次総会（ナショナルリソースセンター主催）に出席し、ワークショップやポスターセッションへの参加、情報交換を通して最新情報の入手に努めた。(2009 年度)
　ディスレクシア等学習障害への対策・言語政策が政府主導で活発に進められているシンガポールに注目し、2011 年 2 月に 5 日間・6 施設（DAS 関係者との面会を含む）を訪問し、授業参観、関係者と情報を交換した。DAS Jurong Point Learning Centre は学習障害を支援する政府直轄の施設であり、ディスレクシアに対するケア・サポート体制を持つ。最優先に訪問し、スタッフとの面会、議論を通して実際の活動の様子や課題について具体的な情報を得た。(2010 年度)

４．研究成果

前項①・②に対応させ、その成果を示す。①2009～11 年度継続実施の各学習調査・オーラルパーセプションテストで特に下位群に一定の伸長が見られた。アンケートと聞き取り調査から明らかになった事実として、クラスサイズや指導案等の制約から中学・高校の段階で「音声に特化した学習」が殆ど行われていないことが懸念される。発音はコーラスリーディングのみで、個々の音素の違いを聞き分けたり、実際に発音したりといった活動がなされていない。(様々な批判はあるが)フォニックスを支持し、積極的に授業に導入する教員に教わった学習者は、類似点の多いオーラルパーセプション活動に抵抗少なく取り組んだものと推察される。シンガポール現地校訪問の折、リメディアルクラス専用の教室に掲示されたポスターや指導教材の多くはオーラル活動、特に音素やフォニックスに特化したものが目立った。これらと同一線上にあるオーラルパーセプション活動の意義が再確認されたものである。加えて深谷・平井（1999）が学習障害児とその近接領域児を対象としたケーススタディにおいて指摘した点との類似が明らかになった。

(1) 文字の導入以前に英単語、英会話を入れた活動を行う→文字に比べると「音声」に対する反応が早く、習得が期待できる。

(2) ジャズチャンツ等「リズムに乗っての学習」は効果的である。

(3) 記憶の定着のため「視聴覚教材」を積極的に利用した反復練習を増やす。

(4) 特にディスレクシアの場合「英語を習慣的に聞かせ、音節ごとに声を出しながら綴る」等、「聴覚性言語」の習得を強化する。

(5) 学習障害の場合、概してメタ認知が弱いので、平素から読み書きにおいて肯定文、否定文、疑問文の区別、単数、複数の区別、現在・過去といった時制の区別等のチェック項目を用意し、常にモニタリングさせながら学習する習慣付けを行う。

音声面を重視した指導では、下位群ながら上位群に並ぶ、あるいは上回る成果を示した者が複数人出たことで一定の成果が認められた。

②アメリカ（2009 年度・大学初年度教育 FYE 学会年次総会参加）とシンガポール（2010 年度・DAS および教育機関視察）が主軸となるが、特に後者では政府の主導による系統的な学習障害に対する取り組みが顕著であった。実際の指導場面、教室での教員による「気づき」→周囲の理解を深める努力→学習支援・教員支援→学習者への共感・理解といった一連の流れが明確なプロセスとして完成している。学習者を劣等感や失望感から救うことで、未来の国家を担う人材を育む意欲に溢れた点は先進的であり、学ぶべき所が多い。DAS の活動はディスレクシアに悩む学生を支援することに留まらず、指導に当たる教員や教育関係者、親への支援にも拡散している。2004 年に設立されたファウンデーションコースを受講することで、ディスレクシアに関する知識や体系を学び、受講者は学位やディプロマを取得することが可能になった。沿革の中で注目すべきは「早期発見と処遇」を極めて重要視している点にある。年少の児童に対して詳細な診断テストを実施することは実質難しいとしながらも、プレスクール（幼稚園）の段階で「at risk」な要素を持つ、ディスレクシアや学習障害を想起させる児童に対しては、放置することで大きくなる問題を極力回避するために、またディスレクシアの有無に関わらず、スムーズに小学校への移行を進められる、積極的な支援を行う姿勢が徹底していることは、学習障害に苦しむ本人のみならず、指導教員や家族にも強力な信頼感を与える体制であろう。

研究成果の可視化として、「音声指導の重要性―潜在的なディスレクシア学習者のために―（研究紀要論文・2011 年度)」を始めとして複数の紀要論文を共同執筆し、上梓した。DAS Jurong Point Learning Centre を始めとするシンガポール各教育機関への訪問により得られた情報を盛り込みつつ、ディスレクシアに対するケア・サポート体制を概括したものである。また学会発表として「学習動機・学習方法と学習効果―なぜ学習効果があがらないのか―」をテーマに 3 人の研究者による学会発表（大塚英語教育研究会 2011 年 12 月月例会内）を行い、研究成果に対して大学教員を始めとする有識者らとの意見交換を行なった。日本人英語学習者を対象としたディスレクシアに関する認識・理解は依然として途上の過程にあるが、大学における初年度教育の根幹となるリメディアル学習がそもそも学習障害への処遇を想定したものである以上、ディスレクシア学習者に対する理解と支援をより一層加速させる必要がある。好例として、リヴォルヴ学校教育研究所（NPO 法人・茨城県つくば市・理事長小野村哲氏）は、ディスレクシア対策・指導を積極的に推進している団体のひとつで、学習障害に苦悩する生徒や親にとっての駆け込み寺的な存在となり、学習・心理両面のサポートやディスレクシア診断テストの開発等、貴重な成果を示している。学校という教育現場だけでは対応、解決の難しい問題を先送りせず、多方面との連携、支援を得ながらより早期の解決を目指すことが不可欠である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

中川武、佐藤敏子、山名豊美「音声指導の重要性―潜在的なディスレクシア学習者のために―」つくば国際大学研究紀要、査読有、2012、18 巻、27－40、
佐藤敏子、中川武、山名豊美「リメディアル教育の実施―教材選択とその効果の検証―」つくば国際大学研究紀要、査読有、2011、17 巻、7－48、
佐藤敏子、中川武、山名豊美「なぜ学習効果があがらないのか―学習動機・学習方法と学習効果―」つくば国際大学研究紀要、査読有、2010、16 巻、23－39、

〔学会発表〕（計１件）
「学習動機・学習方法と学習効果―なぜ学習効果があがらないのか―」大塚英語教育研究会 12 月例会、2011 年 12 月 10 日、筑波大学東京キャンパス、

〔図書〕（計１件）
①佐藤敏子、わかりやすい英語教育法―小中高での実践的指導　浅羽亮一・佐藤敏子・千葉克裕・豊田一男・中村典生・山崎朝子（共著）、三修社、2009（第 1 部第 2 章 3、第 2 部第 2 章 2、第 3 章 2 執筆）

６．研究組織
(1)研究代表者
中川　武（NAKAGAWA TAKESHI）
つくば国際大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：70326817
(2)研究分担者
佐藤　敏子（SATO TOSHIKO）
つくば国際大学・産業社会学部・教授
研究者番号：60241832
山名　豊美（YAMANA TOYOMI）
つくば国際大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：60285757